

# Jane, Lady Shelley

津田 迪雄

1848年6月22日Sir Percy Florence ShelleyはJane St. Johnと結婚した。シェリーの人物像と名声形成に絶大な力をふるうことになるLady Shelleyの登場であった。その直前にMary Shelleyは、PercyはJaneを選んでこの上なく幸運だ、彼女は最も素晴らしい女性だといひ、Janeの優しさを強調し、善良で誠実そのものであり、社交を好まないで家庭的で静かな生活を好むPercyと似合いだと付け加えている。結婚後もJaneは女性の理想像であり、やさしく、穏やかだが、快活だと賞賛は変わることがなかった。

Janeは1820年Newcastle-on-Tyneの銀行家Thomas Gibson (1759~1832)とAnn Shevill (?1790~c.1866)の9人の子の一人として生まれた。両親は正式の結婚はしなかったようである。Gibsonは子供たちそれぞれに5400ポンドを残したが、Janeは父の死後、弟Edwardとともに湖水地方のBassenthwaiteに住む父の妹一家と暮らすことになる。1841年彼女はBolingbroke子爵兼St. John子爵George Richard St. Johnの末の息子Charles Robert (1807-44)と結婚、夫が病身のため田舎で、Maryによると「母のように」夫を看病したが、1844年夫と死別。二人の間に子供はなかったが、夫の残した庶子の後見人になった。再婚時彼女には15,000ポンドの財産があった。

MaryとJaneの出会いはミステリーじみている。ある日、姉からChester Squareの広場の向かい側の *Frankenstein* curtains を見るように

言われ、ついで友人たちからMary Shelleyと知り合いになるようすすめられた。次に舞台はドイツのバーデンに移り、知り合いになった若い男からSir Percy Shelleyと結婚してほしいと頼まれた。そしてBayswaterの友達の家に滞在中、応接室に降りていくと見知らぬ婦人が座っていた、それがMary Shelleyだったというのである。

かつてMaryはPercyが結婚すれば女房天下になるのではないかと心配したが、適切な妻を選べば理想の夫にふさわしい性質だと考えるようになった。そして遂

にJaneを見つけたというわけである。それにしてもMaryの執心は並大抵ではなかった。その背景にはJaneの人柄に加えて、シェリーが存在していた。彼女がシェリーとMaryに関心をもっていたのは姉がMaryの家を教えたののからも察せられる。彼女はシェリーのセンチメンタルな崇拜者にすぎなかったと言う

指摘は正しかろうが、過激なシェリーの崇拜者だったら、無神論を薄めシェリーを世に認めさせる努力を続けていたMaryは二の足を踏んだにちがいない。Percyの妻は彼女の後を引き継いでシェリーの遺稿遺品を管理し、シェリーの名声を高めうる女性でもなければならなかったのである。

PercyとJaneはTorquayで初めて出会ったが、この過程でPercyの姿は殆ど見えてこない。後年のJaneの容姿については「Gibson一族の特徴である背が低く、太り気味で、顔の造作は大きく、男性的な容貌をし、若い頃



より、年取ってからのの方がきれいに見えた」というMrs. Brayの回想があるが、Percyが積極的になる要素は見あたらない。PercyにとってJaneは母が心酔している女性であり、JaneにとってPercyはシェリーとMaryの息子であった。しかし結婚後、Maryの期待は裏切られず、夫妻は幸福な結婚生活を送り、Maryは切望していた平穏で幸福な家庭生活を初めて味わうことになる。「彼らは幸福です、それを見ると私も幸福です」とMaryは書いている。Janeと暮らしたのは僅か2年半余りだったが、友人知己への手紙にはJaneへの賞賛が鏤められた。結婚後彼らはField Placeで暮らしたが、湿気でJaneが病気になるため解決策として1849年頃、夫妻はBournemouth近くのBoscombeに400エーカー（49万坪）の土地を買った。荒涼とした土地だったが、Janeの‘very pretty little place’から考えると積極的だったのはJaneであったと思える。Maryもボスカムに行くよう勧められたが断りChester Squareから動こうとしなかった。Maryが淋しいLericiをどんなに嫌っていたか二人とも知らなかったようである。Maryはボスカムに行くことなく1851年2月1日Chester Squareで帰らぬ人となった。死を覚悟したときMaryは父母の側に葬られることを願った。JaneはSt. PancrasがあまりにわびしいのでBournemouthに葬り、Godwin夫妻を移葬することでMaryの希望を叶えた。

1851年春、Sir PercyとLady Shelleyはボスカムに移った。Sir Percyは家の隣に劇場を建て俳優兼脚本家兼舞台装置家として素人芝居に熱中した。シェリーを思い出させるのは垂れ幕に描かれたカサ・マニだけであった。彼の趣味はかねてからのヨットに加えて、自転車、写真など多岐に渡り、趣味の人としての一生を送ることになる。

一方Lady ShelleyはMaryから委託されたシェリーの遺品遺稿の保管と彼を世間に受け入れさせることに心身を捧げた。加えてMaryの名誉を守り、偶像化するという仕事も彼女は自分に課した。彼女はその仕事を——恐らくMaryの望んだ以上に——徹底的に遂行し

た、障害となると考えたものはいかなる手段を使っても排除しようとした。Sir Percyの劇場に対し彼女は私室のくぼんだ小さな部屋を遺品の保管室とした。入口には絹のカーテンが吊され、青く塗られた丸天井には金色の星が描かれ、赤いランプが燃えていた。シェリーの心臓を頂点とする遺品遺稿、彼とMaryと子供の肖像、彼の友人たちの品物が収められた。しかし、それは単なる保管室ではなかった。それを彼女は「聖室」と呼んだが、シェリー教の祭壇であり、彼女は女祭司であった。入室を許されるのは、敬虔なシェリー教徒のみで、シェリーの主要な詩でなく*To a Skylark*のような詩を賛美歌のように読むことが賞揚された。

1854年頃、夫妻は彫刻家Henry Weekesにシェリー像の制作を依頼した。完成は1863年頃と思われるが、溺れたシェリーをMaryが抱きかかえているもので、構図はミケランジェロのピエタを思い出させるが、Lady Shelleyの希望が強く反映されたものであろう。シェリーはキリスト、Maryは聖母である。ここにおいてシェリー教に於けるMaryの位置づけが明らかになる。彼女はこの像をMaryの眠るBournemouthのSt Peter'sの内部に置こうとしたが、不適當と言う反対に遭い、やむなくChristchurchのPriory Churchに置くことになった。なおレプリカも作られ「聖室」に安置されることになる。またシェリーの肖像画については、Miss Curranの画から複製が何種類も作られたが、その度により空靈的でより女性的な‘Divine Poet’へと変貌していった。それは過激なシェリーの抹殺に役だった。*Shelley Memorials*第3版につけられた口絵は極めて女性的な肖像であり、Lady Shelleyの望むシェリーの人物像を端的に示している。

1850年代にシェリーの偽造された手紙が多数出回った。そのためシェリーの望ましい人物像が歪められるのを恐れたSir PercyとLady Shelleyはシェリーの公的な伝記を用意する時期だと考えた。それは「シェリー家の全面的裁可のもとで」‘Divine Poet’の伝記として書かれねばならず、Harriet問題が試

金石となった。Lady Shelleyのシェリーの旧友Hogg、Peacock、Trelawnyをボスカムに集め回想を語らせるという企てはTrelawnyの拒絶に会い失敗したが、彼女は英国国教会教徒となり保守派に転じたHoggに白羽の矢を立て、シェリー家所有の資料、主として手紙の利用を許した。1858年Hoggの伝記の最初の2巻が出たが、'Divine Poet'にはほど遠いOxford時代の騒々しい、おどけたシェリーと'the good Harriet'の扱いにLady Shelleyはショックを受け、以後資料へのアクセスを差し止めた。これに懲りた彼女は大英博物館のRichard Garnettを雇い、火と鉄を使って不都合な資料を処分した。1858年には他にもTrelawnyの*Recollections*、Peacockの"Memoir"に加えてシェリーを知らないMiddletonの伝記が出たが、不満な彼女は1859年彼女の名でシェリー家公認の資料集*Shelley Memorials*を出版し、以後シェリーの伝記はこの資料によることを要求した。しかしそこには都合の悪い資料についての歪曲、ごまかし、欺瞞が存在する。とりわけHarrietの姦通問題にPeacockは怒り"Memoir"第2部(1860)でHarrietを弁護した。それにボスカムのスポークスマンGarnettが反論、Peacockは"Supplementary Notice"(1862)において再反撃しLady Shelleyとその追従者に一矢を報いたが、GarnettはシェリーのElizaについての言及をHarrietにすり替えるという詭弁を弄して再反論した。MaryはHarrietの娘Ianthéに配慮してHarriet問題には慎重であったが、Lady Shelleyは目的を達するためには手段を選ばなかったのである。

1863年Sir PercyとLady Shelleyは初めてローマのシェリーの墓をたずね、Lericiを訪れた。Lericiでは都合のよい話が彼らを待っていた。シェリーの遺体をその腕に抱いて運んだと称する老水夫がSir Percyの足に口づけしてシェリーはキリストのようだったといい、鉛筆によるMaryの肖像画の前で毎晩お祈りをしているというものだった。1869年Medwinが死ぬとHarrietを知るものはいなくなりLady Shelleyの威令はあまねく行き渡るように見えた。ところが1878年彼女を激怒

させる事件が起きた。Trelawnyが*Records*でMaryはシェリーに相応しくない妻だったと非難したためである。彼女は、「聖室」に飾られたTrelawnyの髪の毛と肖像画を取り去ると脅し、実行した。1882年Lady Shelleyは「彼女所有の貴重な記録を破棄から守るため」*Shelley and Mary*を私版として12部印刷したが、その序文はまだPeacockへのこだわりを見せている。翌年公的な伝記の依頼が熱狂的な崇拜者Dowdenにもたらされ、1886年の2冊本は半世紀にわたり決定的な伝記と目されることになる。DowdenのHarrietの扱いにLady Shelleyは不満だったが、Sir Percyはある程度の自主性は認められるべきだと弁護した。1886年シェリー協会が設立され、シェリーの名声は不動になったかの感があった。

1889年Sir Percyが70歳で死んだ後Lady Shelleyはますますシェリーにのめり込んでいく。1891年彼女はローマの墓をOnslow Fordの彫刻に変更しようとし、Trelawnyの娘Mrs Callの反対にあい、再びシェリーの記念像は宙に浮いたが、同年12月1日彼女はシェリーを追放したOxfordのUniversity Collegeに手紙を書き、記念像の受け入れを要望し、承諾の返事をえた。Fordによる'Divine Poet'の記念像は1893年University Collegeにおいて除幕されたが、それはLady Shelleyの40年余にわたる戦いの勝利の絶頂を示すものであった。同年Viareggioでもイタリア人たちがシェリーの彫像を建てた。Lady Shelleyの執念はすさまじかったが、Mary Shelleyの賞賛した優しさが失われたわけではなかった。彼女はよき妻であり、よき'Grannie'であり、彼女自身も幸福な家庭生活を楽しんだ。ヴィクトリア朝も終わりに近づいた1899年6月24日、Lady Shelleyは79年の生涯を終えMaryとSir Percyの眠る墓所に葬られた、シェリーのヴィクトリア朝的理想像を遺して。(関西学院大学名誉教授)

---

p.2写真 Lady Shelley (From a photograph taken about 1880) は R. Glynn Grylls, *Mary Shelley: A Biography*, London: Oxford University Press, 1938 による。